



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

The guidance plan to make meal education classes by the students who are conscious of SDGs in Corona

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栞原, 智美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173721

コロナ禍、SDGs を意識した生徒による食の指導案作りの授業

The guidance plan to make meal education classes by the students who are conscious of SDGs in Corona

家庭科 栗原智美

<要旨>

2020年度コロナ禍の授業として、SDGsを意識した食の授業を試みた。2019年度実施の「災害を意識した授業を考える」授業で実践した、誰かに伝える、ことを目標としてまとめていく方法を引き続き高校生が学習指導案を考える授業で試みた。授業者という立場を意識することで、人にわかりやすく伝えるために、正しく深い知識が必要であることを実感し、自分が伝えたいことが伝わるようにするためには、どのようにすると効果的であり、どこを強調すれば伝わるのか、1人1分間のパワーポイントを作成し、発信を意識した授業展開とした。

予測できない未来に「主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人一人が自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくこと」(中央教育審議会2017)が求められ、「持続可能性のとりで」を心の中に築く『持続可能な開発のための教育』があらゆる学校段階、そして生涯教育の中で求められている。(2019、荻原)。生徒自身が課題を発見し、科学的に考え、協働しながら発信しようと試みる機会を持つ授業にしたいと考え、2019年度は班で話し合う方法を取り入れ、否定をされないことが特徴の一つでもあるワールドカフェ方式で自由な気持ちで多くのアイデアが出せる環境を準備したが、2020年度はコロナ禍のため、学校図書館をグループ活動の場として活用することができないだけでなく、教室におけるグループワークも実施が不可能であった。そのような一人一人が離れた位置で着席し、前を向いたままのマスクの状況で、情報共有し、仲間の意見を聞き、気付きを生徒同士で共有し、生徒を揺り動かす(ナッジ授業)の展開をするための工夫として、授業で個人の意見を聞く場面と作業進行途中の考え方などを多く聞く時間を設けた。2019年度と同じく対象は①幼児②小学生③中学生④高校生⑤一般、という5つのグループに分け、発達段階を意識しながら、「コロナ禍、SDGsを意識した生徒による食の授業」を生徒自らが考え、指導案をまとめ、音声で1分間入力した2枚または3枚のパワーポイントを各自が作成した。実際の授業や活動に繋げる授業を想定して工夫をした。

1 はじめに

文部科学省の通達にあるように、コロナ禍における感染防止策を講じながら授業を行っていく必要がある。緊急事態宣言のもと、学校での調理実習の実施もなくなり例年実施している調理メニューをそれぞれの家庭で必要に応じて材料をアレンジして実施した。今回は手に入れやすい食材の話から非常時の食事を考えSDGsに繋げる授業とした。家庭科の授業において実技指導や実習は大切なことと考え、前年度までのカリキュラムの編成とは変えて実施した。

コロナ禍、家庭での学びを逆に学校に持ち帰り、生徒間で共有することが、深い学びの一助につながるものと考えた。コロナ禍変更した食材は生ものだけでなく、家庭にあるものを使うという意識の中、今まで無駄に使っていたものや、意識せず使用していたものに気付くきっかけとなっている。生徒間の学びがお互いの身近な生活の学びとなり、影響し合う場を準備した。

2 授業実践

2-1 共有・気づきの学習から

指導案用プレゼンテーションPPを作る作業へ調理実習が学校において行えない中、課題として今までにやっていた調理実習を家庭で行い、コロナ禍において各自の家庭での調理実習時に変更した食材を取り上げた。下書き用としてB5版プリント1枚を配布し、Googleフォームにも入力をした。その中からの気づきを生徒間で共有することとした。(表1)

「指導案を作る」という課題を出すことで、自分のこととしてコロナ禍のSDGsを意識した食を捉えることができると考えた。コロナ禍、SDGsを意識した生徒による食について、実際に考えたことを発信する学習の準備・知識としての学びをある程度課すことで全く知らない、関心が無い生徒にもある程度の知識を与えることができ、同時に関心のある生徒においては更に深く、本、資料などを用いることで学習することができると考えた。コロナ禍変更した食材は生ものだけでなく、家庭に

表1 変更食材表

ほうれん草→小松菜	特になし
(しいたけ→しめじ) (ししとうがらし→ピーマン)	(しいたけ→しめじ) 家にあるものを使用したから。 (ししとうがらし→ピーマン) ちょうとを自分で購入していたから。
ほうれん草→小松菜 こんにゃく→なし	ほうれん草→小松菜 外に買いに行かず、家にあるもので作ろうと思ったから。
魚の切り身→鶏肉	魚の切り身→鶏肉 家に魚の切り身がなかったため。(買い物にいかないほうが良いと思っていたため、家にある材料だけで作った)
ほうれん草→小松菜、白米→玄米	大根→じゃがいも、油揚げなど家になかった。コロナ禍で買いに行けなかった。
ブリー→鶏肉 ししとうがらし→なし	特になし。
ぶり→鶏肉 ほうれん草→オクラ	ぶり→鶏肉、ぶりを買いに行くよりほちょうどよく家にあった鶏肉で魚の照り焼きをつかった。
豚汁に薬味とお豆腐を追加。	買えていた照りは特になし。
特になし	特になし
なし	なし
加えたもの 昆布、しょうゆ、ごま油	ありません
ほうれん草→インゲン	(ぶり→鶏)理由:家にあった魚が鶏であり、買い物回数で鶏が勝りしかなかったから。
(ほうれん草→小松菜)(獅子唐芥子→胡さや)(しいたけ→しめじ)	ぶり→鶏 コロナ禍なので外に出れなかった時に、家にあったあまりの鶏肉を使った。
ししとうがらし→もやし、しいたけ、しめじ	コロナ禍で買えたものはありません。
豚バラ肉(薄切り)→薄切りロース肉 だし汁(にぼし)→だし汁(あごだし)	コロナ禍で買えたものはありません。
なし	魚→鶏肉 魚を買いに行けなかった。
椎茸→干し椎茸	なし
ほうれん草から小松菜 長ネギから 豚から鶏	長ネギから無し 豚から鶏 家にあったから 外出を減らすため
(ぶり→さわら)	なし
しいたけ→とうふ	しいたけが足りないから
ブリー→鶏肉	鶏肉が安かった。
ぶりから鶏肉	魚が魚屋いなので魚の分だけ鶏肉にした。
なし	なし
ブリー→鶏肉 ししとうがらし→オクラ	ししとうがらし→オクラ 買い物に行けなかったので家にあったもので代用した
ほうれん草→小松菜	なし
なし	特になし
特になし	特になし
煮干し→だし入り味噌	煮干し→だし入り味噌、買い物に行けなかった
なし	なし

写真1



あるものを使うという意識の中、今まで無駄に使っていたものや、意識せず使用していたものに気付くきっかけとなっている。生徒間の学びがお互いの身近な生活の学びとなり、影響し合うことが確認できた。

本校では高校2年生で家庭基礎を週に2時間2単位で

行っている。2020年4月5月の休業中に家庭科で出した課題の中から調理実習課題1の和食、調理品は「ごはんと豚汁、ぶりの照り焼き」のコロナ禍での食材の変更の情報を生徒たちと共有して導入として使用した。(表1)

また、コロナ禍における食に意識を向け、生徒たち自身に、一つ目に「コロナ以前のこと」、二つ目として「ワクチンのない現在(授業時2020年秋現在)と休業中を現在」として、三つ目を「今後の予想や希望」というタイムラインの視点で考えてもらい、その後生徒たち自身が授業案を考えるという流れとした。本校は教員養成を柱とする大学の附属学校でもあり、秋には200名近い教育実習生が実習をした。そのような中で授業を考えること、いろいろな授業があることは、自然に受け入れられていると考えた。

2019年度は「災害・防災」「SDGs」と「食」を意識して夏休みの宿題で調べ課題を出し、「災害・防災」「SDGs」「食」を意識した授業を作った。詳細は2019年度東京学芸大学附属高等学校研究紀要57「災害を意識した生徒による授業案づくりの授業」参照。2019年度は指導案制作時学校図書館という場を使用してワールドカフェ方式で「否定をしないで自由に意見を交換できる」班活動をしたが、2020年度は密を避けるため個人での作品とした。ただし、ワールドカフェ方式の精神である「否定しない」は、情報共有の時にも伝え、この授業の根底にあることを伝えた。一つ目の提出物としてワークシートに記入してもらい、二つ目の提出物として、発表や表現を学習するための1分間パワーポイント動画を各自で作成した。Google Classroom を使っての提出を促した。

図1のパワーポイントは授業時生徒に示したものである。2020年度本校の公開研究会でも示した。授業対象を1. 幼児 2. 小学生 3. 中学生 4. 同世代の高校生 5. 一般、という区分で絞ることと、評価の観点を意識して、何を伝えていきたいかという自分の思い、を考えて授業づくりをするように伝えた。

「授業をする」ということはより深く調べて、より分かりやすく伝える必要があるため、自分が選んだ内容については、深く学習してほしいことを伝えた。関連して2019年度の学校図書館でのワールドカフェ方式については東京学芸大学附属学校紀要47集「今日の課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察」に掲載。

図1 2020年度公開授業時提示パワーポイント

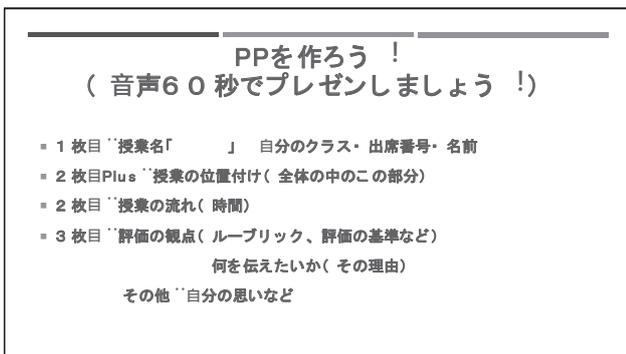
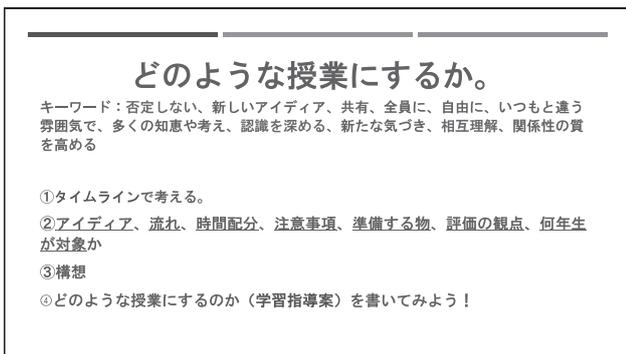
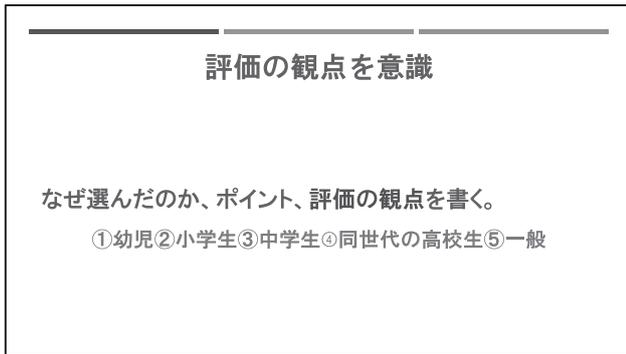
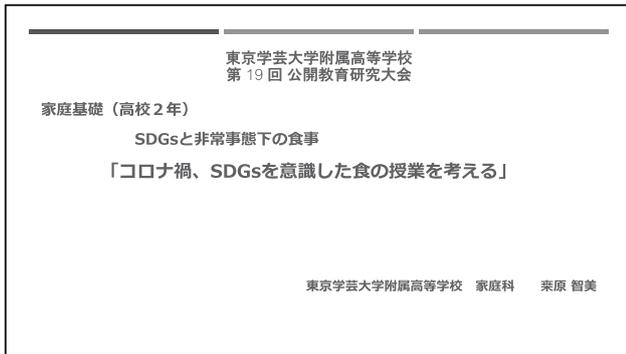


図2 事前フォーム入力メモ用プリント

家庭科
2年 組 番氏名 _____
フォームにも入力します。
例：
①変えた食材 (りんご → みかん)
(牛乳 → 豆乳) (→)
②特にコロナ禍なので、変えたもの (鮭「魚」 → 鶏肉)
理由: 生が揃わなかった。肉は冷凍したものがあつた。買いに行けなかった。高かつた。他
調理実習1 (和食)
①変えた食材 (→) (→)
(→)
②特にコロナ禍なので、変えたもの
(→) 理由:
(→) 理由:
調理実習2 (中華)
①変えた食材 (→) (→)
(→)
②特にコロナ禍なので、変えたもの
(→) 理由:
(→) 理由:
調理実習3 (洋食)
①変えた食材 (→) (→)
(→)
②特にコロナ禍なので、変えたもの
(→) 理由:
(→) 理由:

授業を実施する直前の2020年9月に事前アンケートとして図2のB5版プリントと同じものをGoogleフォームで質問をしている。内容は家庭での「調理実習1. 和食4月の課題」「調理実習2. 中華5月の課題」「調理実習3. 洋食8月夏休みの課題」となる。変えた食材についての質問では、特にコロナ禍なので「変えた食材とその理由」、そして「気づいたことSDGsについて何か関連することはあるか」ということを聞いた。関連事項としてコロナ禍での休業中4月5月の時期に「省エネ行動・省エネ設定」の課題でSDGsについて考える機会を与えている。こちらGoogleフォームで回収した。前述の表1は授業時生徒に提示して情報共有と資料として使用した、今回の食材についてのアンケートの集計表の一部である。

コロナ禍、今回使用した和食の調理実習1. の食材変更についての内容とコロナ禍とは関係なく変更した食材について記入したものを、同様に2回目の中華の実習、3回目の洋食の実習についての結果の表を生徒に提示した。また、全体を通して気づいたこと、SDGs 関連で気づいたことの質問を同時にしているので、その記載も併せてプロジェクター画面で提示した。

また、9月の授業時に資料として消費者庁の「食品ロスを減らす！食品お片付け・お買い物マニュアル」をQRコードとともにA3版表裏ありで2枚のプリントにし、農林水産省食料産業局の出している「食品ロス及びリサイクルをめぐる情勢」のURL、朝日新聞の「SDGs世界を変えよう『新しいものさしで考えよう』SDGs17の目標」をA4版表裏プリント1枚にして配布。その後、生徒が記入するワークシートB4版1枚(図3)を配布した。

図3 生徒のワークシート

食について (SDGs・コロナ禍・伝えたいこと)

食生活の現状

食生活の理想

食生活の未来

食生活の現状

食生活の理想

食生活の未来

食について (SDGs・コロナ禍・伝えたいこと)

食生活の現状

食生活の理想

食生活の未来

食生活の現状

食生活の理想

食生活の未来

食について (SDGs・コロナ禍・伝えたいこと)

食生活の現状

食生活の理想

食生活の未来

食生活の現状

食生活の理想

食生活の未来

ワークシートの内容

コロナ禍、SDGs を意識した生徒による食の指導案作りの授業をタイムラインで考えよう。(裏面へ)

どんな授業にするか、自分メモ(自由にどうぞ!):

アイデア、流れ、時間配分、注意事項、準備する物、評価の観点、児童・生徒の場合何年生が対象をタイムラインで考えよう。

指導案の流れ:

発表し、内容・着眼点および発信について考え、深める。

(1時間)

- ・授業の流れの発表を聞き、模擬授業に繋げよう。
- ・ICTを取り入れた、コロナ禍における授業実施について考えよう。(5時間目)

対 象 2年G組(男子21名、女子20名 計41名)

単元名 「コロナ禍、SDGsを意識した生徒による食の指導案作りの授業を考える」

(2)単元の目標

- A 課題を発見する力
自分が伝えたいことが見つけられる。
- B 科学的なプロセスで問題解決する力
対象年齢の発達段階を理解して、正しく伝えられる。
- C 発信する力
自分が大切だと考えることを、正しく表現し、伝えることができる。
- D 展望・計画を持つ力
授業実施について、展望を語るができる。
- E 関係を構築する力、協働する力
他者の発表内容を自分の考えを深めることに使える。

発達段階により、どのような内容を取り上げることがコロナ禍の食とSDGsの学習に適するのかを考えることができる。また、指導案を考え、その内容や評価の観点を伝え・発信する努力することができることを目標とした。

2-2 授業

(1)単元計画

第1次 各家庭で実施済の調理課題においてコロナ禍の自分の食材変更などについてまとめ、発表資料を通して他の人と情報を共有し、コロナ禍と食について考え、指導案を作成する。(3時間)

- ・コロナ禍における食に意識を向け1 コロナ以前2 ワクチンのない今と休業中を含めた現在3 今後の予想や希望、をタイムラインの視点で考えよう。(1時間目)
- ・評価の観点を意識して、どのような授業にするか考えよう。(2時間目)
- ・発表を聞き、情報を共有してより深く考えよう。(3時間目)

第2次 指導案をパワーポイントにまとめ、1分間の音声入りに仕上げる。(1時間)

- ・音声入りの発表動画を作ろう。(本時4時間目)

第3次 ICT機器を使い、音声入りパワーポイントを

(3)単元設定の理由

- ・生徒たちの実態および本単元に至るまでの学習

緊急事態宣言のもと、学校での調理実習の実施が不可能となり、例年実施している調理メニューをそれぞれの家庭で必要に応じて材料をアレンジして実施している。コロナ禍における例年と違う編成でのカリキュラム実施となっている。1. 家庭の中で、消費生活におけるSDGsに関わる行動と省エネ設定の課題をGoogleフォームで配信し、家庭での実践とする課題を4月5月に実施している。(省エネ行動と省エネ設定) 2. 調理実習が学校において行えない中、課題として前年度実施の一食分の調理実習を家庭で行い(和食、中華、洋食の3回を本授業までに実施)、コロナ禍において変更した食材をGoogleフォームで回答している。6月はじめより、分散登校となったため、1学期のスタートは密を避けるために20人ずつの体制で、被服実習の基礎縫いでの巾着袋製作、車椅子実習、高齢者、共生社会、エプロン製作(今

回の授業と同時製作進行)である。

・教材の特性と授業者の手立て

コロナ禍の行動や授業形態に条件が付く限られた環境の中で情報共有の仕方や学校図書館での実施が不可能であること補助するために、学校図書館から本だけをまとめて提供してもらい、資料として準備したり、官庁のHPの紹介やQRコードを示して、各自のスマートフォンやPCなどで活用できる情報を提供し、情報を探す補助をした。コロナ禍、家庭での学びを逆に学校に持ち帰り、生徒間で共有することが、深い学びの一助につながるものと考えた。コロナ禍変更した食材は生ものだけでなく、家庭にあるものを使うという意識の中、今まで無駄に使っていたものや、意識せず使用していたものに気付くきっかけとなっている。生徒間の学びがお互いの身近な生活の学びとなり、影響し合う場を準備した。

授業時に消費者庁の「食品ロスを減らす！食品お片付け・お買い物マニュアル」と農林水産省食料産業局の「食品ロス及びリサイクルをめぐる情勢」の資料と、SDGs世界を変えよう『新しいものさしで考えよう』SDGs17の目標」を配布している。これらの資料は、消費期限や賞味期限などの基本的な話から、干し野菜や保存についての説明やスマホのアプリで冷蔵庫の管理ができるもの、食品ロスについてなどの広がる内容になっている。生徒には関連して、資料を題材として扱う場合は消費者庁や農林水産省のホームページから資料の本物を見て欲しいことを伝えた。

①本時のねらい

コロナ禍、家庭での学びを逆に学校に持ち帰り、生徒間で共有すること、情報の共有を経て指導案作成とその内容のICT機器での発表を経験し、SDGsを意識した食の授業を考えると共に、伝え方について考えることをねらいとした。4月5月の休業中の調理実習課題の和食、調理品はごはんや豚汁、ぶりの照り焼き、などのコロナ禍での食材の変更の情報を生徒たちと共有してSDGsと食について考え、発表を通して情報を共有し、考えを深めることかできる。

②本時の授業展開

時間	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
10分	資料を含めた情報共有等、今までの学習の振り返り。指導案で取り上げた内容とその理由、評価の観点を考える。	教師作成ppを用いて、今までの情報共有の内容と学習の振り返りを促す。資料の活用を伝える。
30分	自分で考えた授業内容・指導案の流れをパワーポイントにまとめ、1分間の音声入りに仕上げる。	パワーポイント1分間の音声動画の授業発表の説明を行う。自分の考えを伝えることを意識させる。希望者にPC準備。
10分	対象者への授業実施について考える。	授業実施等について説明する。保育園、小学校の現在の可能性について伝える。

③評価基準（ルーブリック）

4段階とした。

A 課題を発見する力

4.自分が伝えたいことが見つけられる。3.自分が伝えたいことの大枠が見つけられる。2.自分が伝えたいことを探そうとしている。1.自分が伝えたいことがまったくわからない。

B 科学的なプロセスで問題解決する力

4.対象年齢の発達段階を理解して、正しく伝えられる。3.対象年齢の発達段階を理解することができる。2.対象年齢の発達段階をおおよそ理解することができる。1.対象年齢の発達段階が理解できない。

C 発信する力

4.自分が大切だと考えることを、正しく表現し、伝えることができる。3.自分が大切だと思うことが見つけられ、誰に向けて伝えたいのかその理由がまとめられる。2.自分が大切だと思うことが見つけられる。1.自分が大切だと思うことが、見つけられない。

D 展望・計画を持つ力

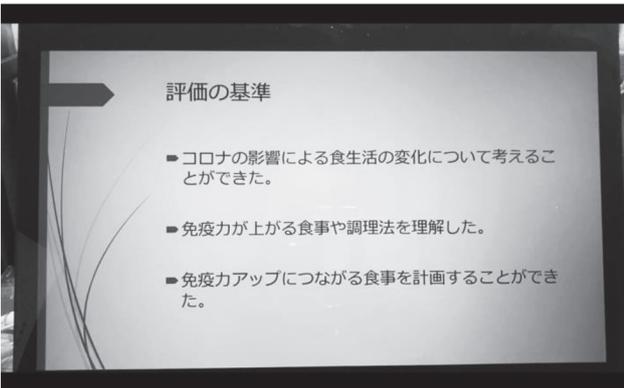
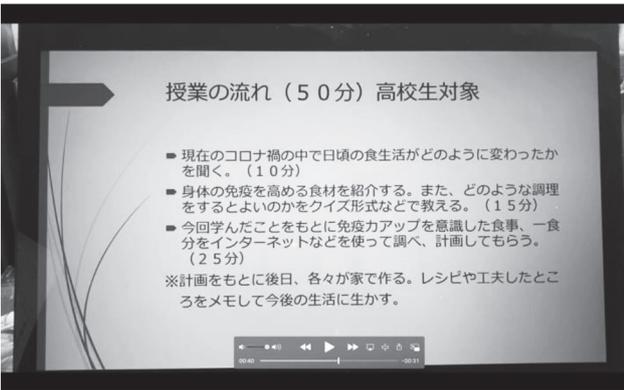
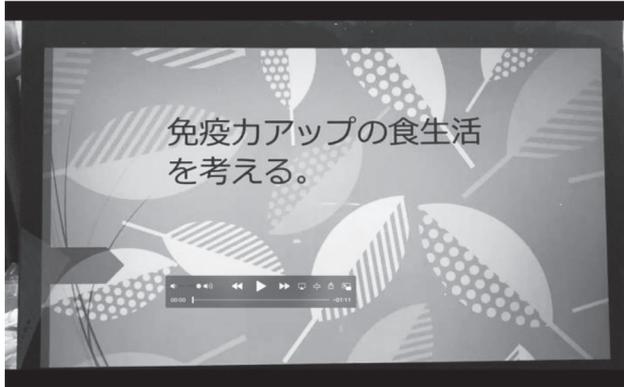
4.授業実施について、展望を語る事ができる。3.授業実施について、展望の希望を語る事ができる。2.授業実施について、自らの希望を持っている。1.授業実施について、考えていない。

E 関係を構築する力、協働する力

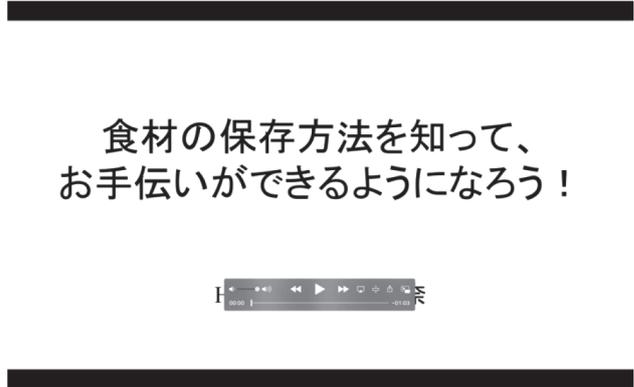
4.他者の発表内容を自分の考えを深めることに使える。3.他者の発表内容を自分の考えを深めることに使おうと

する。2. 他者の発表内容を理解できる。1. 他者の発表内容が理解できない。

図4 生徒が作成したパワーポイント例1



生徒が作成したパワーポイント例2



授業案(対象:小学3年生 時間:45分)

時間	内容	
5	導入	今回の授業の目的と、ルーブリックを示す。
10	実践①	冷蔵庫への食材のしまい方を子どもに考えさせる。 ・2-3日分の食材をスーパーから買って来た想定し、実際に用意する。 ・授業は冷蔵庫のある場所で行う。 ・1-2人を指名しそれぞれ自分が思うように食材を冷蔵庫にしまってもらい、常温保存の食材もある。
10	フィードバック	実践例をもとに、間違っているところなどの話し合い。 チルド室や、野菜室の使い分けについての説明。
5	説明	食材を正しく保存することによるメリットの説明。 コロナ禍やSDGsを考慮して、フードロスを抑える意識を高めさせる。
10	実践②	再び子どもを指名し、冷蔵庫に食材をしまってもらい。
5	まとめ	ルーブリックをもとに、授業によって何を学習したのかまとめる。

評価のポイント

- ・積極的に授業に参加しているか
- ・食材の保存方法を正しく理解しているか

評価項目と配点	4	3	2	1
積極性	3に加え、今後学んだことを実践する意欲がある。	2に加え、話し合いに積極的に発言する。	授業を聴いている姿勢が見える。	授業に参加している。
理解度	3に加え、チルド室と野菜室の使い分けなどを細かく自分で説明できる。	授業内容をよく理解している。	授業内容を理解している。	授業内容を大まかに理解している。

3. 結果

2019年までは災害や非常事態は「仮に」「もしも」の話と受け止める生徒が多くいたが、今回、身近な自分ごとと捉えていた。食材内容では特にコロナ禍なので、変えたもの「魚」→「鶏肉」理由：生が揃わなかった、冷凍したものがあつた、買いに行けなかった、などの回答が見られた。

また、授業後の Google フォームで回収したアンケート（320名配信 251名回答）では、

「もっとこうしたかった、ことを記入」の問いに、

「調理実習で作った、食品ロスを意識したメニューの振り返りとして班での発表活動をプラスしたかった。」

「もっと SDGs について興味を持ってもらうための授業であるため、もっとゲーム性を高めて、より興味を持ってもらいやすく出来れば良かった。」

「ロールプレイングを取り入れて生徒が自分で考える授業を作れたのがよかったです。実際にカードを作ってロールプレイングを行い、生徒の話し合いが自分の想定していた方向に向かうのか試してみたかったです。」

「生徒が興味を持ちやすいカルタなどのゲームを取り入れたかった。」

「アニメーションを用いて、自分の考えに至るまでの過程を具体的に表したかった。」

と、具体的に授業についての改善点が考えられていた。

2021年1月に追加で Google フォームで回収したアンケート（240名配信 124名回答）では、

今後、「『コロナ禍』の『食』を考えること」は、どのような場面で学習できると思いますか、具体的に箇条書きで記入しなさい。（4つ以上考えましょう。）の問いには、

「・地元の特産品を使ったメニューを考える・テイクアウトで売ることができるようなメニューを考える・安全な調理法、作り手からの感染を防ぐためにはどのような対策ができるか考える・隔離されたコロナ患者のためのメニューを考える。効率よく作れて、栄養価が高く、配膳中に冷めてもおいしい食事を考える」

「・スーパーに行って店頭で並んでいる商品をコロナ禍以前のときと比べる。・食材を長持ちさせる方法を考える・冷蔵庫にある食材だけで簡単に料理をする。

・国内産業の生産量を調べて、コロナ禍以前と比較する。」

「・食事をする際の感染対策を学ぶ・コロナ禍における、食品に関するデータを元にした学習。・外食産業へ

の救済措置を考える。・コロナ禍で需要が伸びた食品、及び衛生用品」

「・スーパーに行った時（品不足など）・夕飯の時（親が食事について気遣っているところ）・テレビ（市場の様子など）・店の対応（テイクアウトなどの工夫）」という回答があつた。

もし自分の授業を実施してくれる現場の方がいるとしたらその方への「エールのコメント」を記入してください、の問いには、

「コロナ禍でなかなか食に関して学ぶことは難しいかと思いますが、こんな時こそ食の重要性を教えるべきだと思います。一緒にコロナを乗り越えましょう！」

「生徒が自分たちで考える時間を多くすることを意識して授業を作ったので、自由な発想を引き出せるように否定をしないワールドカフェ方式などを取り入れてほしいです。」

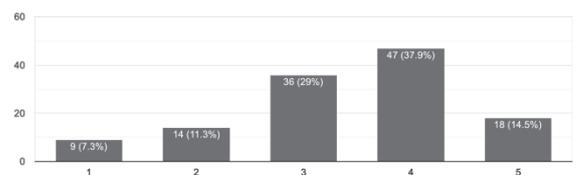
などの、コロナ禍の自分たちへのエールとも取れる回答が複数あつた。

また、ワールドカフェ方式の精神は伝えて授業実施したので、ワールドカフェ方式のように、否定をしない自由な話し合いは好きか、嫌いか。

を問うたところ、図5の結果となつた。5件法の4どちらかというところ、好き、が124名中47人で37.9%となり、自由な話し合いを悪くは思っていないことがわかつた。

図5

ワールドカフェ方式のように、否定をしない自由な話し合いは好きですか、嫌いですか。
124件の回答



4. おわりに

例年実施している調理メニューをそれぞれの家庭で必要に応じて材料をアレンジして実施した。今回は手に入れやすい食材の話から非常時の食事を考えSDGsに繋げる授業とした。家庭科の授業において実技指導や実習は大切なことと考え、昨年度までのカリキュラムの編成とは変えて実施した。

コロナ禍、家庭での学びを逆に学校に持ち帰り、生徒間で共有することが、深い学びの一助につながるものと考えた。コロナ禍変更した食材は生ものだけでなく、家庭にあるものを使うという意識の中、今まで無駄に使っていたものや、意識せず使用していたものに気付くきっかけとなっている。生徒間の学びがお互いの身近な生活の学びとなり、影響し合う場を準備した。

文部科学省の「新時代に対応した高等学校教育の在り方」では、「対面指導かICT活用かという二元論に陥ることなく、最適な組合せにより」「個別最適化された学びと、社会とつながる協働的・探究的な学びの実現が必要」とある。本校は2年生で家庭基礎2単位を履修し、コロナ禍前の2019年度は1学期調理実習3回、栄養理論、夏休みの宿題の災害、防災関連事項のまとめ作成、2学期教育実習生が高齢者、車椅子実習、教育実習終了後2回調理実習、指導案作成授業と発表・発信、エプロン製作、3学期住居、保育の流れであった。例年、調理実習、エプロン製作ともに意欲的に取り組んでいるが、日常的に家庭で実習関連事項に触れる機会は少ないように思われ、知識として学んだ既習理論が実習時に繋がらない場面があり、この結びつけがこれからの課題である生徒たちであった。家庭科の授業において実技指導は大変大切なことであると考え、2020年度コロナ禍の中、実技・実習の可能性として新たな題材をカリキュラムに取り入れた。これはマイナス面だけでなく、日常生活と学校における食の学びを結びつけ、より身近な自分ごととする機会となったと考える。また、発信することを各自が録画録音することことで、よりICT機器を活用・工夫する力をつける機会となった。発信するのも機器を通してなので、直接の対面ではなかった分、自分やクラスメートの1分間パワーポイントがどのように再生され、伝わるのかを客観的に見る事が可能になった。産業構造や社会システムが急激に変化する現代において、実社会でも求められる能力も変わり続ける。新たなことを学び、挑戦する意欲を育てる授業を試みているところである。2019年度の公開研究会で実施をした「災害を意識した授業を考える・指導案作り」授業のコロナ禍版を考える

授業とした。加えて生徒によるICTを用いたまとめとデータでの発表を取り入れている。

2019年度は保育園で授業をする班も日程も決まっていた授業をしに行くことになっているところで、2月にコロナ休業となってしまった。今年度、高校生に授業に来てくださいという保育園が増えたので、今後、代表者が行くのか、リモートでパソコンやプロジェクターなどを使って同期型で行うのか、授業動画を非同期型で見ってもらうのか、などの方法を検討し考えていきたい。

「高校生が授業を考える授業」は、コミュニケーションをとることに繋がるように感じた。深い学びに繋がる要素が授業内にあり、その部分を拾っていくことで授業としての更なる効果を期待できる。自分の日常を身近に感じる授業を家庭科では常に考えたい。

コロナ禍のアクティブなラーニング・デザインとして、他の方法も今後試み、高校の授業での取り入れ方の形を考えていきたい。また、学校図書館を利活用する授業は高校生にとってどのような効果があるのかなども探りたい。「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」に繋げるための授業をどのように考えていくべきかを再構築していくことが今後の課題である。

参考文献

文部科学省中央教育審議会「新しい時代の高等学校の在り方ワーキンググループ」資料